

第2章 史跡を取り巻く環境

第1節 地理的環境

(1) 位置

河合町は、東経 135° 44′ 5″、北緯 34° 34′ 23″、奈良県の北西部を占める奈良盆地中央部西寄りにあって、北葛城郡の北部に位置している。東は曾我川を境として磯城郡川西町・三宅町、南は北葛城郡広陵町、西は同郡王寺町・上牧町、北は大和川を隔てて生駒郡斑鳩町・安堵町に隣接する町域 8.23 km²の町であり、県庁所在地である奈良市より約 15 km、大阪の中心部より約 25 kmの位置にある。鉄道は、町域内に JR 大和路線(関西本線)、近鉄田原本線が敷設され、近鉄大輪田駅、佐味田川駅、池部駅の 3 駅があり、天王寺(大阪)、奈良まで約 30~40 分で到達する。道路交通面では、町域内を県道大和高田・斑鳩線、河合・大和高田線等が通過し、西名阪自動車道及び近郊の国道 25 号、165 号などの広域幹線道路に連絡している。



図5 河合町の位置

第2節 自然的環境

(1) 気候

河合町の気候の特徴については、下記のとおりである。なお、観測データは最寄りの気象観測所である奈良地方气象台(奈良市西紀寺町 12 番 1)の平成 3 年(1991)から令和 2 年(2020)までの過去 30 年間のデータを用いた。

① 降水量

月別の平均降水量を見ると、184.1 mm と 6 月が最も多く、52.4 mm の 1 月が最も少ない。また、年間降水量(合計)の平均は 1365.1 mm であった。年間降水量(合計)の変化は、平成 23 年(2011)から令和 2 年(2020)までの 10 年間の平均値は、平成 3 年(1991)から平成 12 年(2000)までの 10 年間の平均値より 174.35 mm 増加している。

また、年間降水量の平均が最も多かったのは高知県の 2666.4 mm で、最も少なかったのは長野県の 965.1 mm である。奈良県は 47 都道府県中 33 番目であり、比較的降雨の少ない土地である。

② 風

年平均風速は 2.2m/s で全般に風は弱い。いずれの気圧配置においても強風の出現は少ないと言えるが、時折、台風や低気圧、前線、季節風を原因とした局地的な強風が見られる。

風向きは、年間を通じて北よりの風が多く、12 月及び 1 月のみ南風が多くなる。

表 1 過去 30 年間の降水量・気温・風向・日照時間・積雪のデータ

要素	降水量	気温			風向・風速		日照時間	雪
	合計 (mm)	平均 (°C)	日最高 (°C)	日最低 (°C)	平均 (m/s)	最多風向	合計 (時)	降雪の深さ
								合計 (cm)
統計期間	1991～ 2020							
1月	52.4	4.5	8.7	0.8	2.2	南	118.3	1
2月	63.1	5.1	9.9	1	2.3	北北西	120.9	3
3月	105.1	8.5	13.9	3.6	2.4	北北西	157.8	0
4月	98.9	14	19.8	8.7	2.4	北北西	172.9	---
5月	138.5	19	24.9	13.9	2.2	北北東	187.9	---
6月	184.1	22.9	28.1	18.4	2	北北東	138.9	---
7月	173.5	26.8	31.7	23	2.1	北北東	157.4	---
8月	127.9	27.8	33.4	24.1	2.5	北東	202.6	---
9月	159	23.8	28.8	20.1	2.2	北北東	151.5	---
10月	134.7	17.7	22.6	13.5	2	北	149.4	---
11月	71.2	11.8	17.1	7.3	1.7	北	145.3	---
12月	56.8	6.8	11.6	3	1.9	南	132.9	0
年	1365.1	15.7	20.9	11.5	2.2	北	1835.8	5

資料：気象庁 統計地点：奈良市 統計年数：30 年

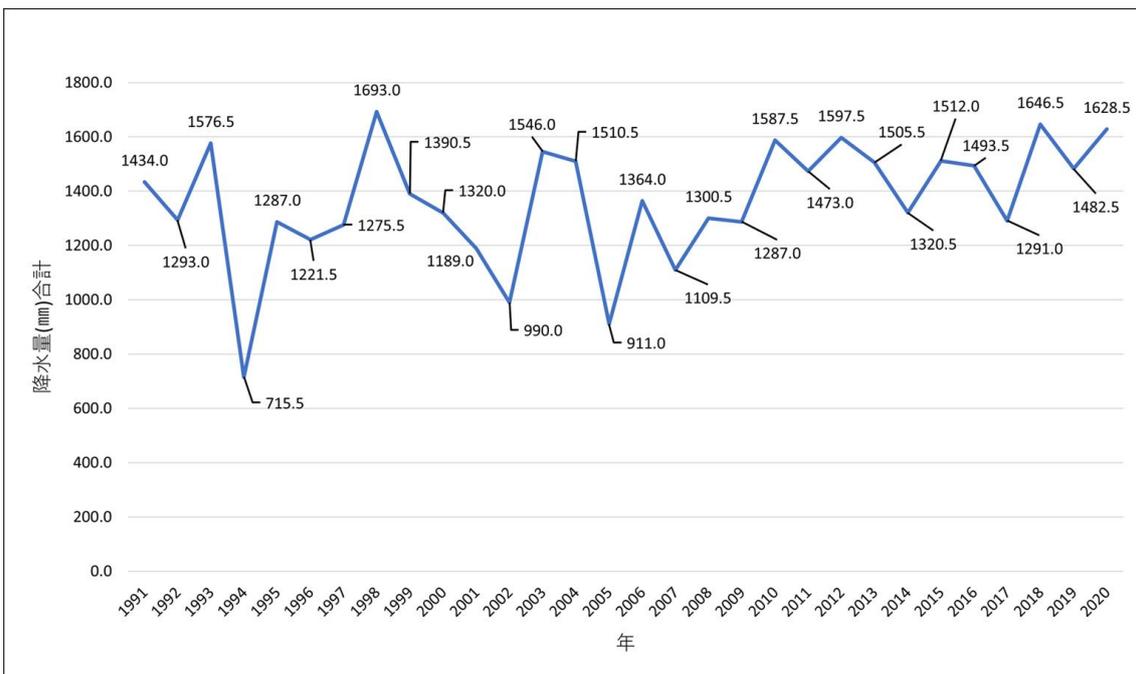


図 6 過去 30 年間の気温の変化資料(気象庁 統計地点：奈良市 統計年数：30 年)

③ 気温

平均気温の最高月は8月で33.4℃、最低月は1月の0.8℃である。盆地であることより、比較的寒暖差が大きい。過去30年の平均気温は15.7℃、日最高気温は20.9℃、日最低気温は11.5℃であったが、令和2年(2020)の平均気温は16.3℃、日最高気温は21.6℃、日最低気温は12.1℃といずれの項目も過去の平均値よりも高くなってきている。この状況はここ数年同じである。

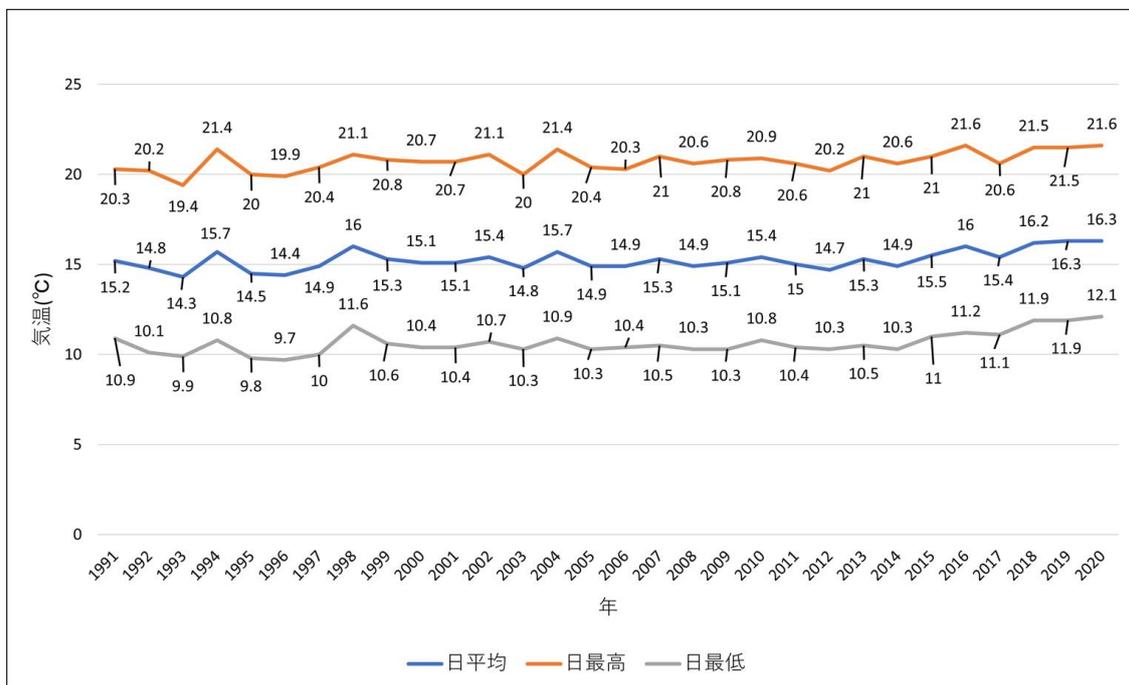


図7 過去30年間の気温の変化(気象庁 統計地点：奈良市 統計年数：30年)

(2) 地形

河合町は、奈良盆地の西部に位置する馬見丘陵の最北端部にある。馬見丘陵は、大和高田市から河合町にかけて南北に広がる標高70~80mの洪積台地から成る丘陵地帯である。

町域の東部は、大和川の支流である曾我川(高田川・葛城川)の氾濫平野となっており、蛇行した旧河道が田畑の区画として残っている。標高は40~45mである。

中央部は馬見丘陵を北流する佐味田川によって開析が進んだ谷となっており、支谷が入り組んだ複雑な地形となっている。標高は南の広陵町との境界付近で約46m、北の大和川との合流点付近で約38mである。

西は丘陵内を開析し北流する葛下川と佐味田川に挟まれた丘陵地である。標高は葛下川沿いの低地が約37m、最高点は中山台の97mである。

史跡大塚山古墳群の立地は、町域北東部の丘陵裾部の微高地上に位置し、標高42~48mを測る。大塚山古墳の東、城山古墳の南は曾我川の旧河道で一段低くなっている。その高低差は約3mほどである。

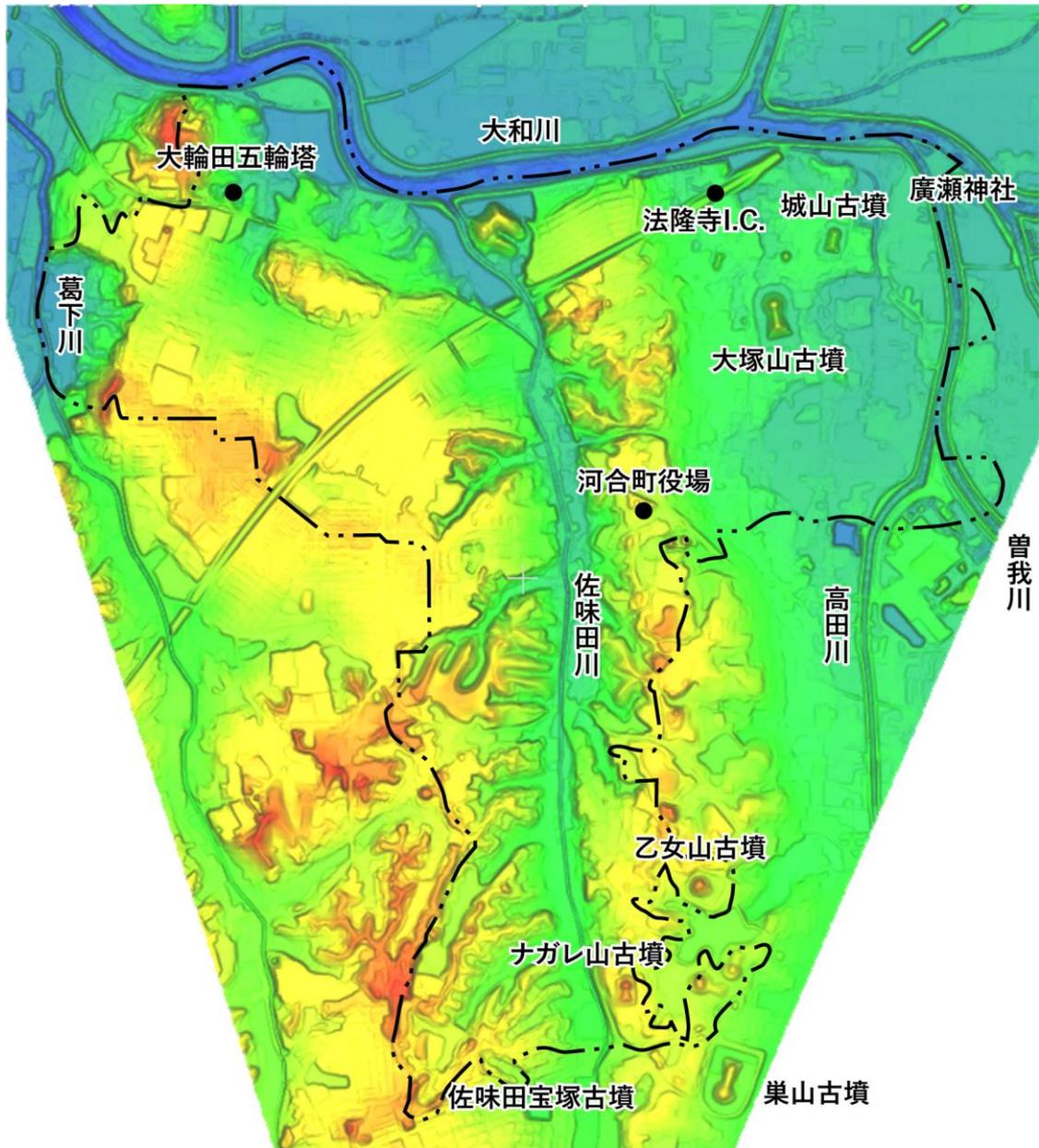


図8 河合町周辺の地形段彩図

(3) 地質

河合町の地質の特徴は下記のとおりである。

- ・ 低地は、新生代第四紀完新世の谷底平野や河川平野堆積物、自然堤防堆積物で被われる。
- ・ 台地は、新生代第四紀更新世の汽水成層ないし海成・非海成混合層、新生代新第三紀中新世の非海成層砂岩・砂岩泥岩互層ないし砂岩・泥岩、新生代第四紀更新世の汽水成層ないし海成・非海成混合層、非海成層、段丘堆積物に被われる。
- ・ 丘陵の北西端部に奈良盆地の基盤を成す領家帯花崗岩類の中生代の花崗閃緑岩、トナール岩が見られる。

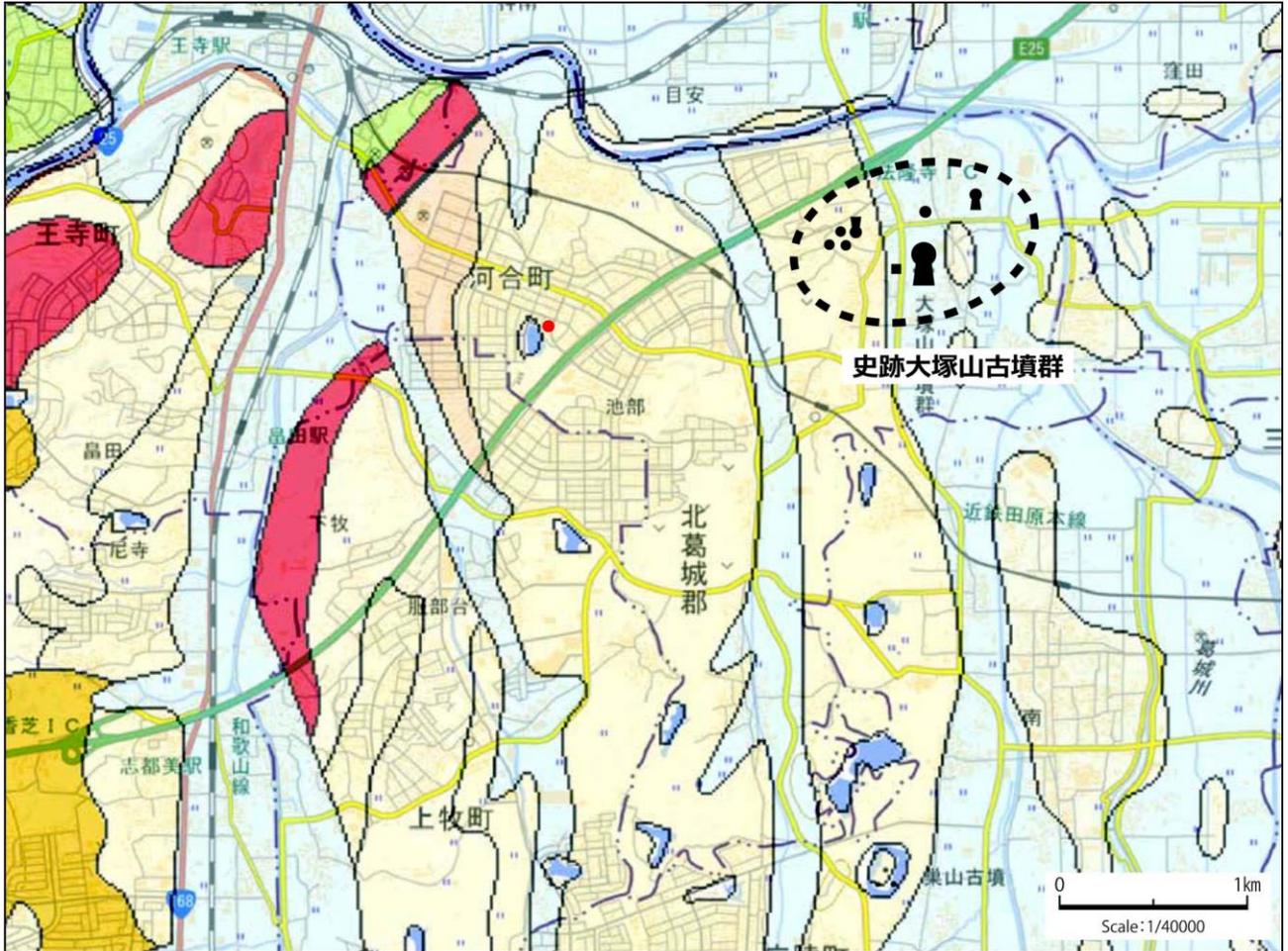


図9 河合町周辺の地質図(地質図 Navi より加筆抜粋)

(4) 植生

河合町の中央から西部に広がるかつての馬見丘陵は「モチツツジーアカマツ群集」や「クヌギ・コナラ群集」といった中部南東部から近畿中央部、四国東部太平洋側の「里地・里山」を代表する二次林が広がり、これらの中に集落が点在し、その周辺においてイチゴやブドウの果樹園が営まれるという景観が広がっていた。しかし、高度経済成長期の昭和40年代(1965~1974)以降の宅地開発によりこれら里地・里山の景観は失われていった。

大塚山古墳群のかつての景観も上記のように里地・里山や集落周辺の耕作地に古墳が点在するものであったと考えられる。昭和56年(1981)に発行された『河合町史』には大塚山古墳の植生が記されてお

り、墳丘は全山クヌギ、コナラなどの雑木林で、後円部にモウソウチクの竹林があるとされている。墳丘上に見られる植物として、クヌギ、コナラ、クリ、ナラガシワ、エノキ、ガマズミ、ニワウルシ、ア

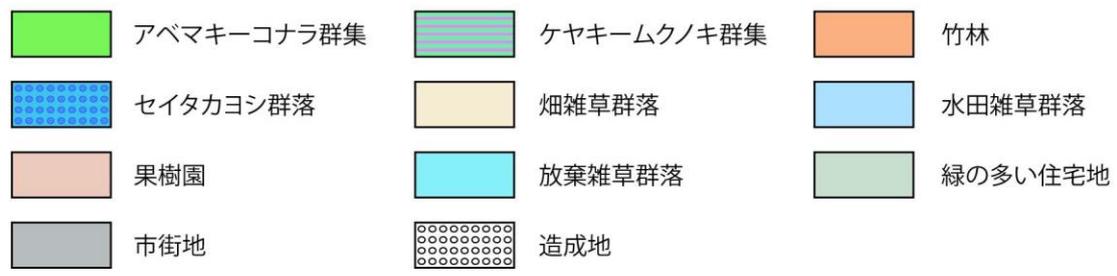
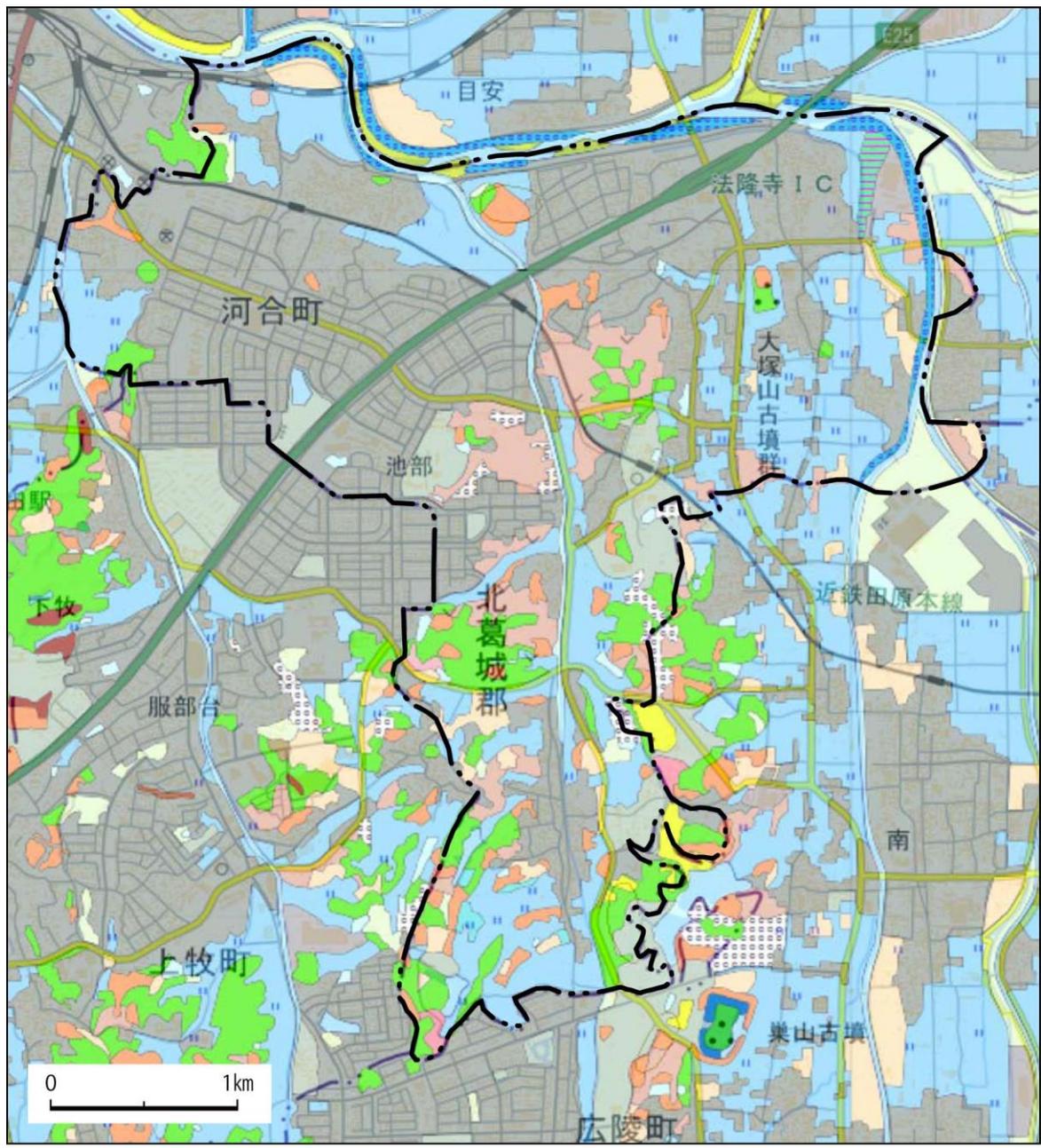


図 10 河合町周辺の植生図(資料：自然環境基礎調査「植生調査」)

カメガシワ、タラノキなどの落葉樹や少量のナナメノキ、シャシャンボなどの常緑樹も見られる。蔓性植物にはフジ、樹下にはネザサが全山を覆っている。ススキ、セイタカアキノキリンソウなども繁茂している。これらは馬見丘陵において主に見られる植物類であるとしている。大塚山古墳群の他の古墳についても恐らくかつてはこのような植生を成していたと思われるが、集落に近いこともあり耕作地としての開墾がなされるなど、その様相も変化していったものと思われる。現在では、大塚山古墳は『河合町史』に記された植生と変わらないが竹林の範囲が墳丘全体に広がっており、樹木類が相当駆逐されているようである。城山古墳は集落に近いこともあり開墾され耕作地となっている。墳丘は耕作地の荒廃放棄が進み、草木が繁茂してきている。丸山古墳は、樹木は見られないが、全体が雑草で覆われている。高山塚一号古墳、二号古墳、三号古墳、四号古墳は教育委員会事務局により定期的な草刈りなど管理がなされている。

第3節 歴史的環境

(1) 河合町の歴史

【旧石器以前】

大正14年(1925)に当時の穴闇西山のブドウ畑の開墾中、シガゾウの門歯(牙)の化石が発見されている。この化石について、今から130万年～140万年前のものとして推定されている。出土した場所については現在の高塚台で、旧河合第三小学校の南側に位置している。他にも河合町で5箇所、上牧町で2箇所からシマカシフゾウ等の大型動物化石が出土している。現在、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館に保管されているシガゾウ・シカマシフゾウの化石については、奈良県指定文化財(天然記念物)に指定されている。



図11 旧ゾウの化石(佐味田地区出土)

【旧石器時代】

旧石器時代のものが見つかった主要な遺跡として馬見二ノ谷遺跡とフジ山遺跡が挙げられる。

本町山坊に位置する馬見二ノ谷遺跡は後期旧石器時代の遺跡である。平成14年(2002)・平成15年(2003)の発掘調査において、2箇所の谷に周囲から流れ込んだ土砂からおよそ6,500点にのぼる石器類が出土している。谷に接する尾根上の平坦部に石器作りの場所があったことは間違いない。石器のほとんどは二上山周辺で採れるサヌカイトを素材として作られており、遺跡の時期としてははっきりと示すものは少ないが旧石器時代の終わりに近い約15,000～16,000年前の可能性が考えられる。



図12 フジ山遺跡鳥瞰写真とナイフ形石器

本町の北側、佐味田川と大和川の合流点に位置するフジ山遺跡は、丘陵地の東側山頂部付近で旧石器時代のナイフ形石器や剥片が採取されている。

【縄文時代】

大塚山古墳の東側に位置する宮堂遺跡は、平成6年度(1994)の発掘調査により縄文時代晩期の縄文土器の破片が数点と多数の石器が出土している。その他、石器を作るための原石や石核・剥片も多量に出土しており、集落等が営まれ石器作りが行われていたと考えられる。石器については二上山付近で採れるサヌカイトで作られている。また宮堂遺跡の南側に位置する長楽遺跡では、縄文時代後期の土器や石器が出土し、北側の宮堂遺跡より前段階の遺構の存在が窺える。大塚山古墳の西側に位置する九僧塚古墳からも縄文土器・石器が出土している。



図 13 馬見二ノ谷遺跡現況

【弥生時代】

町内で弥生時代の集落跡が確認されているのは舟戸・西岡遺跡のみである。古くから弥生土器や石包丁が採取され、弥生時代の遺跡であることは認識されていたが、舟戸山山頂部で農作業中に偶然弥生土器が多数出土したことや、その後の発掘調査で弥生時代後期の住居跡が検出されたことから、高地性集落が築かれていたと考えられる。東側平坦部では弥生時代から奈良時代の遺物が出土し、掘立柱痕が検出されている。そのことから弥生時代以降、連綿と集落が営まれていることがわかる。

【古墳時代】

本町とその南側に位置する広陵町・大和高田市・上牧町・香芝市にまたがるように馬見丘陵があり、そこには多くの古墳が造られた。その丘陵の名前から馬見古墳群と呼ばれ、本町の古墳はその中の中央群と北群に位置する。大塚山古墳群については北群の範囲に入る。

馬見古墳群中央群は、古墳時代前期後半の別所下古墳・ナガレ山北3号墳の築造から始まり、ナガレ山古墳・乙女山古墳等の古墳が大小合わせて30基以上確認されている。また中央群から外れる位置にあるが、本町南端の丘陵地に佐味田宝塚古墳があり、そこから出土した家屋文鏡は、古墳時代の建造物研究の基礎資料として取り上げられている。

北群は馬見古墳群中央群の大型前方後円墳の位置から離れた本町川合付近に築かれている。古墳時代中期後半の大塚山古墳が築かれ、中良塚古墳、城山古墳と築造が続く。立地が奈良盆地の低平地



図 14 史跡乙女山古墳全景

にあり、また大和川が合流する地点に位置することから、被葬者は大和川の水運を治めていた人物と考えられる。またこのような立地条件から馬見古墳群中央群とは別系譜とみている。大塚山古墳東側の微高地に位置する宮堂遺跡では、大塚山古墳の築造に先行する時期の竪穴住居跡が確認されており、遺物についても土師器等が出土している。大塚山古墳や城山古墳が造られた時期に、これらの古墳を造った人々が生活していた集落があったと考えられる。宮堂遺跡の南側の長楽遺跡では、小規模な方墳2基が検出され、古墳群の東側に小規模古墳が継続して築造されていたと考えられる。また、前期の埴輪片も出土しており、大塚山古墳群に先行する古墳もあったと考えられる。



図 15 史跡ナガレ山古墳全景

他に町内では、古墳時代後期～終末期にかけて池部三ツ池古墳群や佐味田石塚古墳群の築造がみられる。

【飛鳥時代～古代】

大塚山古墳群の東側に位置する宮堂遺跡には、飛鳥時代の集落跡があったと考えられるほか、大塚山古墳群の西側の穴闇には長林寺が創建される。聖徳太子による創建と伝えられており、昭和 62 年(1987)と昭和 63 年(1988)の発掘調査により、金堂跡基壇の痕跡などから斑鳩の法起寺と同じ伽藍配置であったことが分かっている。また、出土遺物は飛鳥時代～奈良時代にかけてのものを中心に多量の瓦類が出土している。その中には『長倉寺瓦』と書かれた奈良時代の瓦が出土しており、古代では長倉寺と呼ばれていたとされる。

また、長林寺跡より南の位置に池部三ツ池古墳群があり、6 世紀後半から 7 世紀前半にかけて形成さ



図 16 長林寺跡出土文字瓦
(町指定文化財)

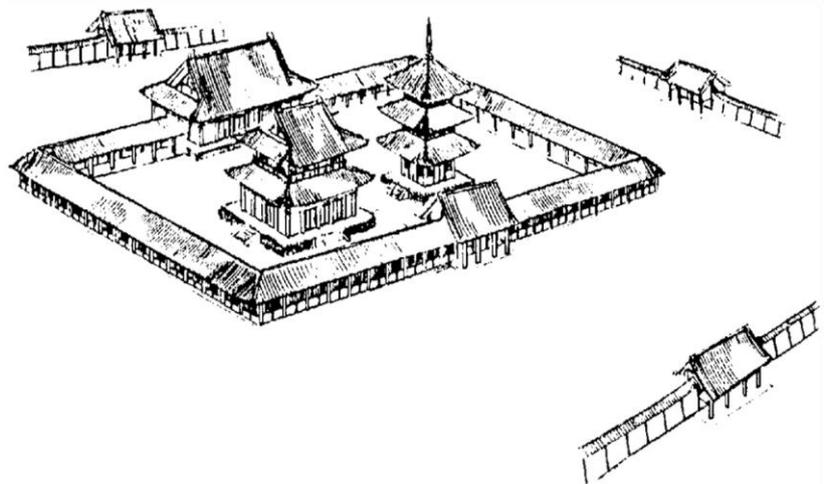


図 17 長林寺跡伽藍想定スケッチ

れていることから、この古墳群の被葬者が長林寺の創建に深く関わっているものと思われる。

大塚山古墳群の北東側に位置する廣瀬神社は、実際の創建年代は不明であるが、社伝では崇神天皇の時代に創建されたと記されている。また史料では『日本書紀』天武天皇 13 年(684)に天武天皇が神社に行幸されたと記されている。

河合町の西側に位置する薬井瀧ノ北遺跡では、長屋王邸所用の瓦を焼成した瓦窯跡が発掘調査により確認されている。この薬井地域は長屋王家の『片岡御園』の範囲内にあたるとされ、ここから蔬菜(そさい)類を進上していたと長屋王邸跡出土の木簡に記されている。

宮堂遺跡の南側に位置する長楽遺跡には、平安時代以降の文献に現れる「小東荘(こひがしのしょう)」といわれる荘園があったとされ、実際に発掘調査で平安時代の帯の飾りである石帯の丸軔が出土している。



図 18 長楽遺跡出土丸軔

【中世】

大塚山古墳東側の居場垣内遺跡や城山古墳の北側に位置する市場垣内遺跡は、環濠を持った屋敷が形成されていたとみており、実際に発掘調査によってその形跡を確認している。また大塚山古墳や城山古墳の墳丘を、河合城・川合城の砦として用いられていたとも伝えられている。



図 19 市場垣内遺跡出土遺構

【近世】

江戸時代、本町の地域には薬井村・大輪田村・城内村・穴闇村・川合村・長楽村・池部村・山ノ坊村・佐味田村の 9ヶ村あり、大半は郡山藩の領地であった。また、大塚山古墳より北の大和川沿岸に、舟運の船着き場・荷上場として「川合浜」が整備される。船着き場の位置が異なる可能性はあるが、川合浜の前身となる川港があったといわれている。



図 20 川合の町並み

【近現代】

明治 20 年代(1887~1896)までは大和川の舟運を利しての農業が一層盛んになり、イチゴ、スイカ、サツマイモ、ブドウ等の商品作物が積極的に導入され、県下でも有数の農業地域として推移していく。また、大正 7 年(1918)に大和鉄道(現在の近鉄田原本線)が開通して以降、徐々に本町の市街化が進展していった。昭和 40 年(1965)頃から西名阪自動車道の開通と前後して西大和ニュータウンなど

の住宅団地の建設が進むにつれ、農業の生産活動は低迷し、近年、住宅を主体とした町となっている。明治以降の行政沿革は、明治 22 年(1889)に 13 大字からなる河合村が誕生し、明治 24 年(1891)には 沢・大野・寺戸が広陵町へ分離した。その後、昭和 40 年 (1965)以降の急激な人口増を経て、昭和 46 年 (1971) 12 月 1 日より町制を施行し現在に至っている。

第 4 節 社会的環境

(1) 人口

河合町の令和 5 年(2023)3 月 31 日時点の人口(住民基本台帳上の数値)は 16,986 人、世帯数は 7,957 世帯である。

総人口・年代別人口の推移については、下記の図のとおりである。令和 2 年(2020)の国勢調査の結果を見ると老年人口割合は奈良県全体と比べて高く、年少人口割合及び生産年齢人口は低い。また、総人口については、令和 2 年(2020)と比較して令和 7 年(2025)に 94%、令和 17 年(2035)に 79.6%、令和 27 年(2045)には 65.5%と減少することが推計されている。(※ 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」より)

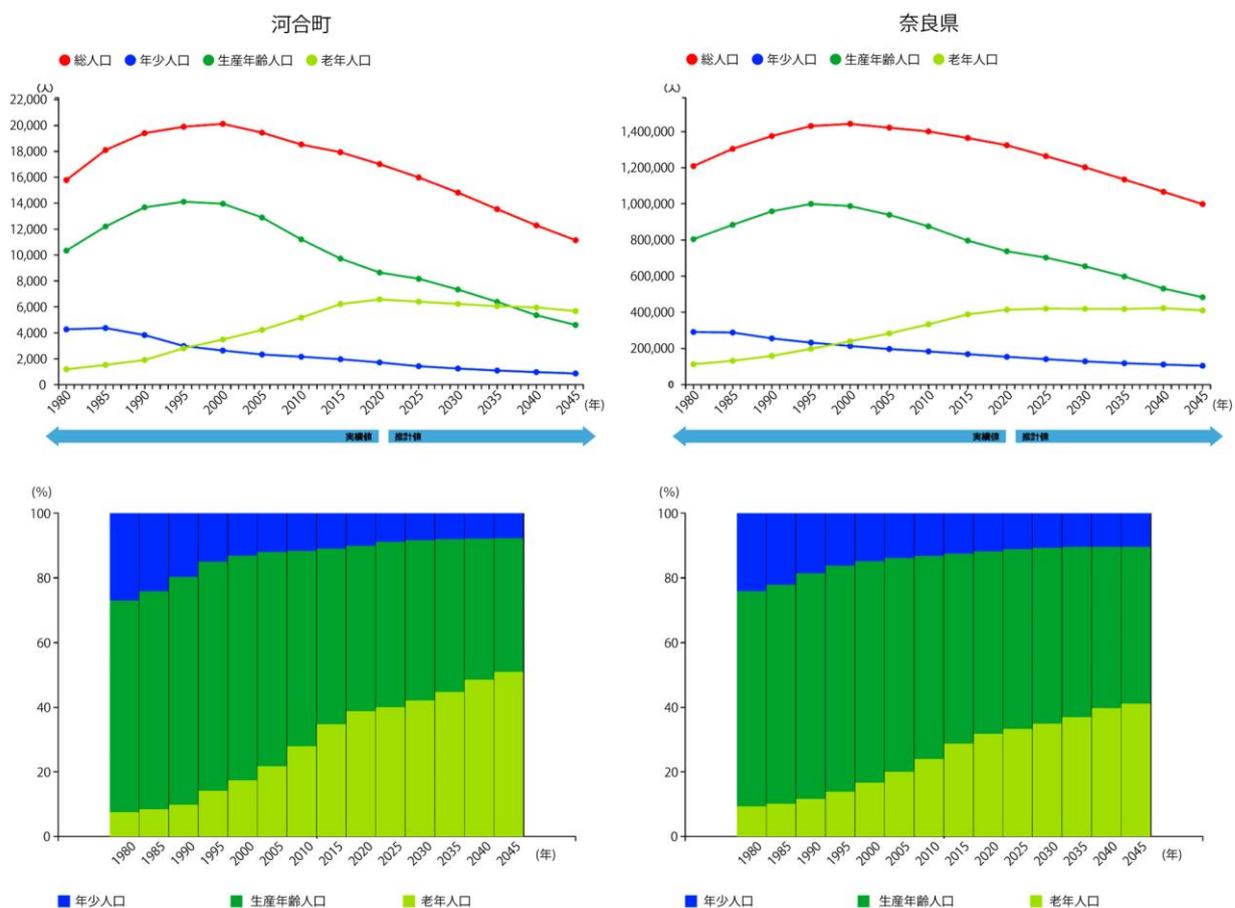


図 21 総人口及び年代別人口の推移(河合町・奈良県)

(出典：RESAS-地域経済分析システム〔内閣府-経済産業省〕一部加筆)

(2) 土地利用

河合町の総面積は 823.0ha である。土地利用の状況は、市街化区域が約 341.9ha(41.3%)、特定保留区域が約 10.8ha(1.3%)、市街化調整区域が約 474.3ha(57.4%)となっており、全体の約 4 割が住宅や商業地、工業用地として活用されている。また、豊かな自然環境や歴史的風土が形成される区域、また農用地などである市街化調整区域は全体の 6 割弱であり、町域の半分以上を占めている。都市計画マスタープランには、「豊かな自然や歴史ある町の特徴を活かしつつ、“ゆとり”や“潤い”を身近に感じながら、より質の高い都市生活を送ることのできる地域づくり」を目指すとしてあり、自然環境の豊かな地域と居住区域の両立を目指した土地利用の計画となっている。

(3) 産業

河合町に所在する企業数を見ると、「卸売業・小売業」が 72 社(21.6%)と最も多く、次に「医療・福祉」が 46 社(13.8%)、「製造業」が 41 社(12.3%)と続く。ただし、「医療・福祉」及び「製造業」については全国や奈良県と比較しても比率は高く、この地域の特徴とも言える。就業者数についても、第 3 次産業への就業者数が圧倒的に多い。直近の調査データ(出典：国勢調査)である平成 27 年度(2015)の結果を見ても、全国平均が 67.2%であるのに対し河合町は 71.7%と全国を上回っている。

「製造業」の内訳としては、「その他の製造業」が 10 社(24.4%)と最も多く、次に「食料品製造業」が 7 社(17.1%)、「プラスチック製品製造業」が 6 社(14.6%)と続く。「食料品製造業」については、川西町や広陵町、三宅町、上牧町など隣接する自治体では一桁台と下位にランクされるのに対し 2 番目に多いのも特徴的である。奈良県で最も多い「繊維工業(19.3%)」は、河合町では 12.2%と 4 番目である。

(※ 出典：RESAS-地域経済分析システム〔内閣府-経済産業省〕)

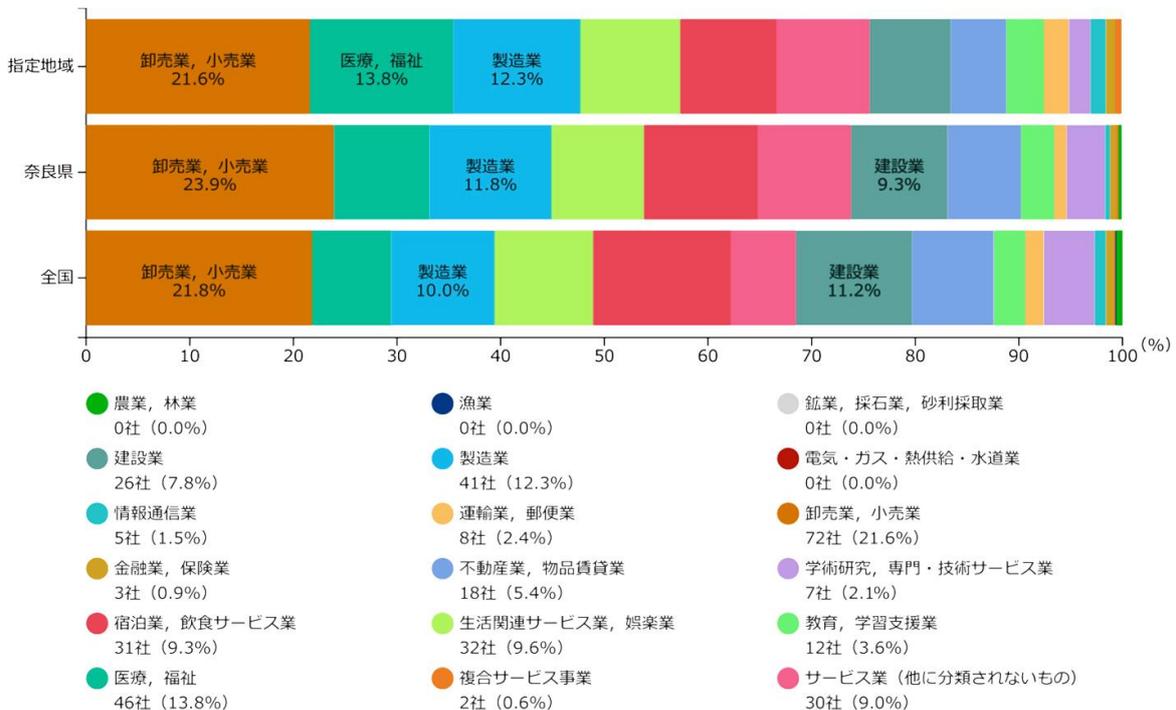


図 22 河合町の産業構造(出典：RESAS-地域経済分析システム〔内閣府-経済産業省〕一部加筆)